

〔報告〕

地域の育児実態との関連における高齢者支援体制の検討

岩村 龍子<sup>1)</sup> 北山 三津子<sup>2)</sup> 両羽 美穂子<sup>1)</sup> 菱田 一恵<sup>2)</sup>  
平山 朝子<sup>3)</sup>

Exploration of the support system for the aged related to the actual condition of child care in the community.

Ryuko Iwamura<sup>1)</sup>, Mitsuko Kitayama<sup>2)</sup>, Mihoko Ryouha<sup>1)</sup>, Kazue Hishida<sup>2)</sup>,  
and Asako Hirayama<sup>3)</sup>

I. 目的

住民の健康や生活を支える保健婦の援助のあり方, 中でも住民同士の助け合い・支え合いに主眼を置き, 地域の関係機関や住民活動を巻き込んだ, 地域全体での支援体制づくりをめざした援助のあり方を明らかにするため, 平成12年度からH市S地域において, 後期高齢者がいる世帯への全数訪問(以下, 高齢者調査と称す)を行い, 生活実態や介護・援助に関する現状と意識を捉え, 個別援助や地区活動等の実践を継続しながら検討してきた。

その中で, 当地域の高齢者の介護や援助については, 家族や親戚で行うものという志向が強く, 他の人の援助を受け入れることが難しいことがわかった。また, このような家族内問題解決志向の強さに起因して, 家族員の負担が大き, 家族で解決できなくても社会資源の利用や近所の人等の援助が受けられない, 高齢者の身体機能が低下すると本人も訪ねる人も家族に遠慮して往来ができなくなり孤立する, といった問題が確認された<sup>1, 2, 3)</sup>。同時にこれらの問題に対する, 地域住民や関係者を巻き込んだ保健婦の援助活動も, この家族内解決志向を変革しなければ, 発展できないことを確認した。

さらに, 当地域での保健婦の援助のあり方を検討するためには, 高齢者の介護や援助の役割を担う若い世代の思い・考えを把握すること, 高齢者以外の援助課題や問題解決方法に関する実態把握が必要である。

そこで本研究では, 地域で支え合う必要がある, ケアを含む人の世話であるという点で, 介護と共通する育児を取り上げ, その実態を問題解決方法に焦点をあてて捉え, 育児を支える体制を明らかにする。その上で, 高齢者を支える体制づくりの可能性を追究する。

II. 研究方法

1. 調査対象

昨年の高齢者調査を実施した91世帯のうち, 乳幼児がいる10世帯の育児者, 及び同調査対象外世帯のうち協力が得られた3世帯の育児者を対象とする。

なお, H市S地域は高齢化率21.0%の兼業農家が多い農業地域で, 総世帯数318のうち高齢者がいる世帯は

表1 調査対象内訳

( ) 内は乳幼児数

		高齢者調査世帯	高齢者調査対象外世帯	合計
乳幼児がいる世帯数		14 (16)	28 (35)	42 (51)
調査対象世帯数		10 (12)	3 (3)	13 (15)
調査方法別内訳	面接	7 (8)	3 (3)	10 (11)
	アンケート	3 (4)	0	3 (4)

176, 乳幼児がいる世帯は42である。

2. 調査方法

平成13年7月～8月, 対象世帯を訪問し, 育児者から, 児の健康・生活・遊びの状況, 家族の育児協力の状況, 育児支援資源の利用状況, 近所の人や友人との交流, 助

1) 岐阜県立看護大学 機能看護学講座 Management in Nursing, Gifu College of Nursing

2) 岐阜県立看護大学 地域基礎看護学講座 Community-based Fundamental Nursing, Gifu College of Nursing

3) 岐阜県立看護大学 学長 President, Gifu College of Nursing

け合い・支え合いの状況やそれらへの思い・考え等について聞き取りを行う。仕事等で不在の者へは、家族員を通じてアンケートを依頼し、訪問にて回収する。アンケートにあたっては、回答しやすいように一部の質問項目を削除及び変更し、データは聞き取り分と分けて扱う。

### 3. 分析方法

育児の実態を、家族や地域住民、友人、専門職者、社会資源等との関わりの中でどのような方法で問題解決されているかに着目し整理する。次に、昨年度の高齢者調査で確認した要援助高齢者の状況を、育児の実態の整理の仕方に対応させて示す。

## Ⅲ. 結果

### 1. 育児の状況（今回の調査結果）

面接で10人、アンケートで3人の情報を得た。調査実施世帯は3・4世代にわたる6人以上の家族との同居が多く、児の年齢は0～5才までばらつきがあった。回答者及び主な育児者はすべて母親であった。

1) 健康面で気になること、日常生活面で困ることの内容、及びその対処方法（表3、表4）

健康面は、体重の増え、歩行、情緒面など発育・発達に関するもの、う歯や汗疹などの疾病や予防接種に関するもので、健診・医療機関への受診や誰かに相談することで解決していた。

日常生活面は、排泄や食べ方に関するもの、生活リズムの乱れ等で、育児経験のある友人や姉妹、保育の専門職である保母に相談し解決していた。疾病や対処が難しいことは保健医療や保育の専門家の意見を聞く、日常的内容や経験からのアドバイスが必要なものは友人、家族、親戚など身近な人に相談する、というように、その内容により対処方法や相談相手を選択していた。また、同じ内容についても複数の対処方法をとっている場合があった。件数は友人への相談が最も多く、次いで専門家への相談、健診・医療機関への受診であった。

2) 遊びの状況（表5）

表2 世帯の状況および児の年齢別人数

	世帯員数					世代数			世帯数計	乳幼児の年齢						乳幼児数計
	4人	5人	6人	7人	8人	2世代	3世代	4世代		0才	1才	2才	3才	4才	5才	
面接	1	1	6	1	1	1	4	5	10	2	3	3	1	2	0	11
アンケート	0	0	2	1	0	0	0	3	3	0	1	0	0	0	3	4
計	1	1	8	2	1	1	4	8	13	2	4	3	1	2	3	15

表3 気になること・困ることの内容別対処方法

（面接調査回答者10人 a～j で示す）

気になること・困ること		対処方法
健康面	落ち着きが無く、言うことを聞かずに騒ぐ(a)	友人に相談する
	3才児健診で眼科の精密検査が必要と言われた(b)	近所の在宅看護職の友人に相談する
	歩き方がおかしい(d)	1才半健診で相談する
	体重の増えが悪い	新生児訪問を依頼する
	ソケイヘルニア	友人に相談する
	汗疹の対処(i)	義母に相談する
	哺乳瓶がやめられず、虫歯がある(j)	歯科の定期受診 1才半健診で相談する
	虫歯があるが診察をいやがる(d)	歯科医に相談する
	予防接種についてわからないことがある(d)	近所の在宅看護職の友人に相談する
	予防接種を早く済ませたいが、発熱してなかなか行けない(d)	体調を整え、できるものから済ませるようにしている
日常生活面	感染症にかかりやすいので心配(h)	仕方がないと思う
	オムツはずし(a)	友人に相談する
	ウンチを覚えてくれない(b)	体験保育時、保母に相談する
	スプーンの使い方をどう教えるか(c)	親戚(保母)に相談する
	育児一般(d)	友人に相談する 姉妹に相談する
	母の仕事の関係で、大人の生活リズムに合わせざるを得ないこと(f)	仕方がないと思う
	近くに公園や遊び場がない 水路が多い(j)	保育所の園庭開放日に参加

表4 気になること・困ることの対処方法

（複数回答）

		面接 (回答者10人)	アンケート (回答者3人)	計
相談する	夫		1	1
	実父母		1	1
	義母	1		1
	友人・知人	4	3	7
	専門家	3		3
	姉妹	1		1
	親戚(保母)	1		1
友人(在宅看護職)		2		2
健診・医療機関受診		3		3
育児書を読む			1	1
放置もしくは自分なりの対処		4		4

在宅児は定期的に育児支援資源や民間の体操教室に通う以外は、自宅や庭・畑・あぜ道で両親や祖父母、きょうだいと遊ぶことが多い。近くに遊び場がないため、やむを得ず小学校や地域外の公園へ出かけており、近所に母子で集える公園ができることを望んでいた。

### 3) 育児の協力者 (表6)

夫の育児参加が全員にあり、遊んだり、絵本を読み聞かせることや、入浴やおむつ交換、歯みがきといった実際の世話もされていた。その協力の度合いは世帯によって差があり、協力の少ない世帯では、もっと育児や家事に協力してほしいとの希望があった。その他の同居家族や身内の者からは、児の面倒をみてもらう、必要時に預かってもらう、相談にのってもらう、などの協力があり、特に義父母・実父母の協力が多くあった。

### 4) 資源の利用状況 (表7)

保育園・幼稚園や育児支援資源の利用状況は表7のとおりである。4才以上の児は保育園・幼稚園に通い、3才以下の児は保育園の通園や園庭解放・体験保育、育児支援サークルの利用が多かった。これらの育児支援資源のいくつかに参加してみて、育児支援サークルは子どもを遊ばせる場というより母親同士の話をする場である、保育園の園庭解放は参加人数が少ないので寂しいが子どもは楽しく遊べる、体験保育は母親同士の話や保母への相談ができ、子どもも保育室で遊ばせてもらえるといったそれぞれの特徴を把握し、自分のニーズや好みに合わせて選択していた。

せて選択していた。

利用しない理由は、母親が人見知りするのでチャンス逃してしまった、他の子どもと遊ぶ機会が多いので必要性を感じていない、参加中の母親と年代が違うので入りにくい等であった。新しい制度であるコミュニティママ（育児者の不都合時に、サポーターが児の世話を代行する）は利用していなかった。

### 5) 育児者の交流状況 (表8)

面接で聞いた10人のうち8人に友人との交流があった。結婚前からの友人との交流が育児を通して継続している場合もあるが、主には、育児を通して近所の母子との交流が始まっている。一緒に遊ぶ、昼食を食べに行くなどの行動を共にし、育児に関する情報交換や話しをすることで問題解決やストレス解消し、都合の悪い時は児を預けたり、買い物をしてもらったりといった助け合いができるまで、この交流は深められていた。近所との交流は7人にあった。居住期間が短くまだ馴染めないながらも、挨拶や回覧版を回す、冠婚葬祭の付き合いや地区役員をすることで徐々に交流を広げてきている現状がうかがえた。地域の冠婚葬祭の付き合い方や互助組織、お裾分けといった風習などに戸惑いながらも、大事なことだと思えるようになったと言う人がいた。近くに住む親戚との交流は3人にあり、育児の援助も受けていた。

### 6) 育児に対する近隣の理解や手助けの状況と希望 (表9-1, 表9-2, 表10)

表5 遊びの状況

(面接調査回答者8人)

いつ、どこで、だれと遊ぶか	遊びに関する意見・要望
<ul style="list-style-type: none"> <li>・平日は母と自宅で遊ぶ。週1回の体験保育、2週に1回のリズム体操教室へ行く。</li> <li>・昼間は母親・祖父母と自宅・畑などで遊ぶ。</li> <li>・祖母と近くのあぜ道を散歩する。隣の地区の友人と車で公園へ遊びに行く。</li> <li>・母・兄と一緒に小学校へ遊びに行く。近所の少し年上の子とも一緒に遊ぶ。</li> <li>・自宅で姉や近所の子と遊ぶ。</li> <li>・保育所の友達と遊ぶ。</li> <li>・平日は保育園で遊び、休日は父親が遊びに連れて行く。</li> <li>・農道を散歩する。散歩に出るとおばあちゃん達の注目を浴び、よく話す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・近所に公園がなく、車で出かけなければならない。地区内に一つ小さな公園があるとよい。そこで、子供・母親同士が出会えるかもしれない。</li> <li>・車を使わずに行けるちょっとした公園が欲しい。近くに小学校があるが、乳幼児を連れて母親が集まれる場所ではない。シーンとしていて遊びにくい。</li> <li>・特になし</li> <li>・近所に公園がない。家の周囲は車が多くて危険なので小学校へ行くが、遊具が大きすぎる。市民の森へ行き、来ている親子と遊ぶこともあるが、その場限りであり、近所の友人はできない。</li> <li>・公園に出かける時間的余裕がないので、近所に公園がある必要性はあまり感じない。</li> <li>・自転車で遊ばせる場所がない。</li> <li>・家族が多いので誰かは相手できる。姉が面倒を見るので助かる。</li> <li>・人が集まっているいろいろ話したり遊んだりできるので、公園があるとよい。</li> </ul>

表6 育児の協力者

(回答者13人 a~mで示す 複数回答)

協力者	回答者数	協力の内容・それに対する育児者の思い
夫	12	入浴・おむつ交換 (c. g. h. i. k. m) 一緒に遊ぶ (b. g. h. j. k. l) 子供を叱る存在 (a) 面倒を見る (d) よく話しかける (c) 何でも話し合う (d) 仕上げ磨き・本の読み聞かせ (e) 母 (妻) が胆石で入院した時は祖父母に頼らず一生懸命育児した (i) 思い：あまり子供の世話はしない (f) もっと育児や家事に協力してほしい (g. j)
義父母	6	一緒に遊ぶ (b) 面倒を見る (c) 外にあるトイレに連れて行く (e) 母の相談にのる (i) 預かる (f. i)
実父母	2	預かる (b) 母の相談にのる (i)
父母	5	外出・調理時に預かる (a. b. k. m) 家事, 送迎 (l)
祖母	2	昼間預かる (c) 一緒に食事を作る (c) 様子を見に来る (i)
兄嫁	1	母の相談にのる 育児情報の提供 (i)
夫のおば	1	頼めば預かってくれる (d)
子供	1	入浴, おむつ交換, しつけもしてくれる妊娠中に協力してもらいたいことを話し合った (f)

表7 資源の利用状況

	保育園	幼稚園	コミュニティママ	育児支援サークル	保育園：園庭開放	保育園：体験保育	サークルと体験保育	利用なし	計
0才								2	2
1才	1			1	1			1	4
2才	1					1		1	3
3才							1		1
4才	2								2
5才	2	1							3
計	6	1	0	1	1	1	1	4	15
利用経験者				4	4	2			

地域の人があいさつや声をかけてくれることから、自分たちに関心を示してくれていると感じ、子どもがメダカをほしがった時に、メダカがとれる川の地図を近所の人が驚くぐらい早く持ってきてくれたことから、気にかけてくれていると感じていた。畑で作業している人たちに、子どもが遊んでいるのを見守られていると受け止めていた。助けてほしくて付き合っているわけではないが、何かの時に助けてもらった経験から普段の付き合いが大切であることを認識していた。

高齢者の世話をしながら育児をしている人は、近所の人が事情を理解し、高齢者の話し相手に来てくれたり、

表8 育児者の交流状況

(面接調査回答者10人)

交流相手(回答者数)	交流の内容とそれに対する思い
結婚前からの友人	電話で相談する。
リズム体操教室を通しての友人	育児全般に関する情報交換をする。
町内の友人	頻繁に、一緒に公園や買い物に行く。気が合うので楽しい。育児サークルにも一緒に行き始めた。
友人	週に一回、一緒に昼食を食べに行く。
学生時代からの友人、上の子の保育園・学校・子供会や生協を通しての友人	一緒に昼食を食べに行き、情報交換している。育児は本通りにはいかないの経験者との情報交換は役立つ。世間話や愚痴を言っはストレス解消している。
上の子の学校を通しての友人	外出がままならない時に買い物をしてくれた。
同年齢の子をもつ友人	汗疹の対処方法などの相談をする。
上の子の保育園、生協、育児サークルつながりの友人	それぞれ別々のつながりではなく重なっている。家を行き来したり、サークル・生協活動なども兼ね、集まっておしゃべりする。用事がある時、子供を預け合う。
近所の人(7)	会えば挨拶して、回覧板を回す。お向かいとは冠婚葬祭の助け合いをするので、よく知っている。そこのおばあさんが、子供を見て「大きくなったね」とよく声をかけてくれる。保育園等のつながりがないので、地域にまだ馴染めない面もあるが、地区の役をすることで顔見知りになってきた。畑のことを心配して聞いてくれる人もいてありがたい。 地区の役をしているので、会って挨拶だけの関係ではない。野菜や果物のお裾分けをし合う。冠婚葬祭を助け合う会があり、嫁いだ当初は戸惑ったが、大事なことだと思えるようになった。 地区の役や近所付き合いは義父母が中心。会えば挨拶する。 会えば挨拶して回覧板を回す。野菜のお裾分けをし合う。 会えば挨拶して回覧板を回す。夫の母親が培ってきた関係をベースに、今の近所づきあいができている。 散歩中におしゃべりする。 保育所の園庭開放で会う。
親戚(3)	夫のおば、自分や夫の姉妹 頼めば預かってくれる。 義兄の嫁 いざという時に頼れる。 兄嫁 育児の相談をする。
交流なし(2)	近所にも同じくらいの子供がいるが交流はない。 保育園の親の会にも行かない。

表9-1 育児に対する近隣の理解や手助けの現状

(面接調査回答者8人)

- ・手助けはないが、会えば挨拶してどこの誰か尋ねてくれる。無視しないで関心を示してくれるのはうれしい。
- ・子どもがメダカをほしがっていたら、それを聞いた近所の人、メダカがとれる川の地図をコピーし持ってきてくれた。驚くぐらい反応が早く、気にかけてくれることがよくわかる。都会では子供の物音がうるさくて注意されることもあるが、ここではそのストレスはない。
- ・近所を散歩中、ビニールプールで遊ぶ親子と一緒に遊ばせてもらい、子供も楽しんでた。
- ・近所の人がお菓子を持って祖父の話し相手に来てくれた。子供の世話・家事をしながら祖父にずっとついていけるわけにいかず、また祖父も家族以外と話すことがないのは寂しそうだったので、ありがたかった。近所の人を畑を心配し、家庭菜園にしてくれている。周囲の人が理解し手伝ってくれるのでありがたい。
- ・保育園の送迎バスを待っていた時、忘れ物を自宅まで取りに帰らねばならず、通りかかった近所の人に子供を見てもらって助かった。普段からの付き合いがないと頼めない。
- ・外出がままならない時、近所の友人・親戚から援助の手が出てきた。普段は助けてほしくて付き合っているわけではないが、いざという時にわかった。
- ・畑に人がいて、子供が遊んでいるのを見守ってくれるので、安全と感じている。
- ・助けてもらったことはない。

表9-2 「安心して育児ができる地域だと思うか」に対する回答

(アンケート回答者3人)

- 思う 2人  
 思わない 1人  
 思わない理由 (遊ぶ場がない。保育園に入るまで、育児の話をする近所の人がない。育児に関心のある地域でない。)

表10 育児に対する近隣の理解や手助けの希望

(面接調査回答者6人)

- ・特にない。嫌な面が見えてこない。居心地良く暮らしている。
- ・育児面に関しては特にない。
- ・子育てを近所で助け合うとか、あまり考えたことがない。地域ぐるみの感覚がない。
- ・難しい。自分はよその子でも無関心ではおれない。
- ・自分にはない。核家族の人は地域の役が重なり大変らしいが、頑張っている。
- ・公園があってみんなで集まるとよい。

畑の維持を援助してくれるなど、手助けしてくれることを喜んでいた。

調査者が「助け合い・支え合い」といった言葉でそれができているかと問いかけると、「できていない」「わからない」と答えるが、「地域の人がしてくれたことでう

れしかったことがあるか」といった問いかけにするなど、工夫をすると具体例を引き出すことができ、実際には様々な場面で見守りや手助けが受けられていることがわかった。

一方、中には、子どもが少ないので育児の話をする近所の人がない、遊び場がないと言う人があり、希望には、遊びの項と同様に、近くに公園ができることがあげられた。

## 2. 要援助高齢者の状況 (昨年の高齢者調査結果<sup>2,3)</sup>)

91世帯の後期高齢者116人中、要援助高齢者(日常生活動作—排泄・清潔・着替え・整容・移動・食事—のうち1つでも見守りや援助が必要な者)は38人であった。

### 1) 個別事例の問題点・課題と対処方法

要援助高齢者の問題点・課題は、①本人の健康面34件、②生活面16件、③家族の問題10件、④世帯状況9件、⑤介護12件、⑥社会との交流・外出等15件、⑦問題解決能力7件と集約された。このような種々の問題を重ねて抱えているが、適切な対処ができていない、必要なサービスや援助を受けられていない事例が多くあった。

相談相手は、健康・生活・介護面とも家族が多く、次いで主治医が健康面を中心に多い。他はヘルパーや看護婦が各面で1～2件ずつであった。保健婦を含めた行政や関連機関、加えて地区組織や住民リーダーが、相談を受け援助をするといった役割を果たせていなかった。

### 2) 高齢者の楽しみや生きがいの内容、外出状況

元気な間は、趣味や習い事、人との交流やおしゃべり、畑等の仕事、家庭や地域での役割が楽しみや生きがいとなっており、外出先もこれらに関連したものが多かった。交通の便が悪く、少し遠方へはかなり高齢になっても車や自転車がいわれているが、そのため少し身体が弱ると行動範囲が狭くなっていた。要援助状態になると、みっともない・恥ずかしいものと捉え外に出ない、他者も遠慮して覗きに行けないという状況になっていたが、中には高齢者自身が話し相手や交流機会を求めている、家族が他者に高齢者の話し相手になってもらうことを望んでいる場合があった。

### 3) 介護の協力者

介護者は配偶者や子どもの妻に偏り、家族や身内の協力や、関心を持ってもらうことさえ望めない事例があった。主介護者の肉体的・精神的負担が重く、高齢や健康

状態による問題が見られた。

#### 4) 資源の利用状況

介護保険受給者がいる世帯は12世帯あり、デイサービス、ヘルパー、訪問看護等のサービスを受けていたが、他にも介護保険等の利用が必要と考えられる事例があった。これらは情報が乏しい、家族や周囲に適切な対処方法がとれる人がいない、他者の手を借りることへの抵抗・遠慮がある、といった事情で利用できておらず、調査者の援助で申請に至った事例もあった。介護保険については、無受給世帯の高齢者21人中19人が知っていたが、名称のみの認知で、具体的な内容や申請方法は知らない人が多かった。

他の資源として、地域内のボランティアで運営されているふれあいサロン（月に1回、虚弱者が地域内で集う場）や給食サービスを利用している人が少数ながらいた。ふれあいサロンへは毎回楽しみに参加していた。

#### 5) 介護者の交流状況

介護を介しての積極的な交流は見られなかった。従来より、介護は家族や身内でするもの、できなければ恥ずかしいとさえ思う心情があり、閉鎖的な状況であった。

#### 6) 介護に対する近隣の理解や手助けの状況

人の手を借りることや近所の人に支援を受けることへの抵抗、みっともない姿を見られたくないという思い、家の中を見られ、入り込まれることへの抵抗があり、手助けする方もされる方も消極的であった。しかし、見かけないことが続くとうとうどうしているかと気かけたり、訪ねてきた時は話を聞く、野菜のお裾分けをするといった、ちょっとした理解や手助けは見られた。他にも、手助けしたいという意味のある人がいたが、躊躇して実際にはできていなかった。これらの人は、本人や家族から頼まれたら手助けしやすいし、家にも訪ねて行きやすい、中心になって動く人がいれば地域の活動にも協力できる、と述べていた。一方、独居なので気にかけてほしい、話し相手になってほしい、刺激になるので近所の友人に訪ねてほしい、という人が少数ながらいた。

### IV. 考察

高齢者の介護や援助については、家族内問題解決志向の傾向が著しく強く、他者や地域の人からの支援については極めて関心の薄い地域において、育児実態から高齢者

問題に対する地域支援に関して示唆を得ようと考えた。

当地域での育児は、家庭内では夫や父母の協力を得て、社会的にはいろいろな資源や保健医療サービス、私的な友人関係を中心としたネットワーク、地域の人々等に支えられながら行なわれており、心配なことや問題への対処は、内容に合わせて適切な相談者や方法が選択され、解決されていた。このことから、以下のように考察した。

#### 1. 資源利用やネットワークづくり

現在、介護の場面においては、種々の問題を抱えているにも関わらず、人の手を借りることに抵抗を示し、家族や親戚だけで抱え込むことで大きな負担を担っている現状であるが、育児に見られる資源利用やネットワークづくりができれば、この状況が改善できると思われる。

しかし、高齢者の資源利用の実態から、資源に関する情報不足や資源利用に対する否定的な意識、利用に至るまでの援助が必要な事例があることが明らかになっている。それぞれへの対応策として、先の研究<sup>2)</sup>で述べたとおり、①介護保険や保健福祉事業のPRや相談ができる場を、住民が足を運びやすい地域内に作ること、②援助の必要性を早期に把握し、情報を伝え、必要な援助につなげたり、実際に援助する役割を、保健婦自らが担うとともに、民生委員等の地区役員や住民リーダーがこの役割を担えるような地域システムづくりを住民とともに進めること、③高齢者自身や家族への意識改革をめざした働きかけを継続すること等が必要である。

ここでは加えて、若い世代が、資源への関心や利用意識が高く、情報収集のための方策を持ち、援助者ともなり得ることから、家族や地域の人々の介護への介入を促したいと考える。その基盤として、住民のあらゆる世代を対象に、介護の価値を伝え、介護への理解や関心を高めるための地域全体への啓発的な関わりを継続することが必要と思われる。

育児の問題に関しては、育児中の仲間や経験者、必要に応じて種々の専門職者を選択して相談し、これらの人々を含めた身近にいる人々のサポートを受け解決されていたが、高齢者の問題に関する相談相手は家族が多く、保健婦を含めた行政や関連機関、地区組織、住民リーダー等が、相談を受けたり援助したりといった役割を果たせていなかった。このことから、介護者同士の交流や介護経験者からの支援、高齢者の健康や生活・介護の相談を

受けることができるそれぞれの専門職者の業務の充実、身近な相談者・援助者の育成が必要と考えられる。特に保健婦については、育児に関しては健診や予防接種等の関わりにより、相談者・援助者の役割が当事者に認識されているが、高齢者を支援する役割は当地域では住民に認識されていなかった。そのため、個別援助や地区組織活動への援助、健康教育・相談といった地域に出向いた活動を充実させ、このような実践活動を通して保健婦の役割を伝えていく必要がある。

また、育児者は現在の様々な交流に加え、さらに身近な場所で母子が集う場を求めているが、高齢者も同様に集う場を望んでいた。従って、両者における集う場づくりは、当地域での支援体制づくりにおける共通した優先課題である。その中で、世代間の交流を意識的に行うことが、お互いの理解や交流が深まり、後で述べる助け合いや支え合いの促進にもつながるものと考えられる。

## 2. 多世代にわたる家族員の協力の実現

育児は母親だけがするものではなく、夫婦で、家族で、協力して行うものと捉えていたが、介護に関しては家族の中でも担当者が限られる傾向にあり、主介護者に介護負担が集中する、その結果、十分な介護が受けられていないという問題があった。育児と同様に介護も家族全体の問題として捉えることができれば、改善できるのではないだろうか。要介護者の配偶者や子ども世代が中心となって介護の役割を担い、若い世代を巻き込んでいない世帯があったことから、家族内で介護の問題を共有していくための援助が必要と考える。その際、家族員の高齢者への生活援助や介護への関わりとその意識について、特に若い世代へのアプローチ方法を考えるにあたり、今後明らかにする必要がある。

高齢者への調査で、生きがいに「孫・ひ孫の世話、一緒に遊ぶこと」をあげた人がいた。遠藤らの調査<sup>4)</sup>でも、育児協力で満足感が高い祖母は自尊感情や生活の満足感が高いという結果が出ている。一方、介護者も、肉体的・精神的負担だけでなく、介護体験から達成感や充実感、多くの学びを得られる<sup>5)</sup>ことから、それぞれの世代の家族員がより充実感を持ち生活していくため、人として家族としての成長を果たすため、家族全体で育児や介護といった課題に取り組む意義は大きい。ここでも先にあげた地域全体への多重的な啓発活動が必要となる。

## 3. 地域での助け合い・支え合いの促進

住民は、「助け合い・支え合い」というと、日頃意識していないため難しいことと思いき、「できていない」と捉えていた。しかし、実際は、特に育児において、様々な場面で手助けを受けたり、助け合っており、見守りや思いやりの気持ちだけでも支えになっている現状があった。介護においても、このような状況がわずかながら見られた。このことから、実際に行われている少しの手助けやちょっとした思いやりの気持ちが、地域での助け合い・支え合いにつながることに気付き、日頃の近所付き合いの中で、実践していくことが大切であると言える。援助者側がこのことを伝えるとともに、若い世代の人たちが育児を通して地域の人から受けた手助けや気遣い・見守りなどを、「助けてもらっている」と受け止めていることを家族や地域の人たちに伝え、思いを共有するための援助が必要である。また、高齢者の家族である若い世代には、高齢者の話し相手に訪ねてきてほしいと、近所の人に伝えるだけでも、援助する意思がある人が行動に移せることを伝えたい。

## 4. 今後の課題

本調査は対象者の多くが3世代以上の同居世帯であったので、核家族等のデータを加味した検討を加えたい。

また、介護と育児を共通するものとして検討したが、ケアの対象者が高齢者と幼少者では、関わりやすさに違いがあり、住民の受け止め方も異なるため、今後はこの違いを吟味した研究を加えたい。

## 引用文献

- 1) 岩村龍子, 三浦一恵, 両羽美穂子: 住民同士の支え合いを視点にした地域ケアシステム, 岐阜県公衆衛生研修会研修発表要旨集; 27-28, 2000.
- 2) 岩村龍子, 両羽美穂子, 三浦一恵: 高齢者援助のための保健婦活動のあり方, 岐阜県立看護大学紀要, 1 (1); 59-65, 2001.
- 3) 岩村龍子, 三浦一恵, 両羽美穂子, 平山朝子他: 後期高齢者の全数訪問からみた高齢者支援のあり方, 平成12年度岐阜県立看護大学共同研究報告書; 1-6, 2001.
- 4) 遠藤恵子, 佐藤幸子: 祖母の孫育児に関する研究, 第21回日本看護科学学会学術集会講演集; 358, 2001.
- 5) 北山三津子: 高齢者と介護する家族の学びの特質に関する研究, 千葉看護学会誌, 2 (1); 37-43, 1996.

(受稿日 平成14年2月25日)